

琉球大学学術リポジトリ

[巻頭言] 風に逆らうか、風をよけるか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大屋, 一弘, Oya, Kazuhiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015490

巻 頭 言

— 風に逆らうか、風をよけるか —

副会長 大 屋 一 弘

国際化という言葉が巷に溢れ、大した吟味もされずに安易に使われている嫌いがある。

国際化の最たるものは情報の伝達・交流ではないかと考える。その基本的手段は言葉や文字であるが、これが困ったことに或いは当然のことながら世界中の人が同じ言葉や文字を使う訳ではないので、最も困難でひどく我々を悩ます問題となっている。この問題の解決には他力本願とはいかず、相互の自助努力に待つしかない。その重要且つ初歩的ステップはバイリンガルの精神であり更に好ましくトリリンガル或いはそれ以上のマルチリンガルを目指すことである。言葉を多く知ればそれだけ広く深く情報の収集や発信が出来ること請け合いである。

さて、台風常襲地沖縄で作物選択の最重要基準の一つは耐風性であろう。サトウキビやパイナップルが基幹作物としての位置を占め得たのも、これらの作物が耐風性に優れていたという要因が大きい。

最近では各種熱帯果樹の有望性が喧伝され栽培も広がりつつあるが、やはりこれについても風対策が不可欠で、多くはハウス等における施設栽培に頼っている。

施設は台風の強い風に抗しきれただけ頑丈でなければならず、高額投資を余儀なくされ採算性に悩みが大きい。果樹・花卉等地上に成果がみえるものは華やかで見ると人を楽ませるが、風の害を回避するのに大きな努力と経費がどうしても必要となる。

目を転じて地下に収穫物を生産する作物（根菜類）は見た目には地味であるが、風の被害を受け難く着実に生産が挙げられる。沖縄で歴史の古いカンショはまさにこれであった。ネックとなっている主要害虫のイモゾウムシやアリモドキゾウムシもミバエ類に次いで防除技術が開発されつつあり、健康食品としての再評価もあることからカンショの有用性は高い。

カンショは1例であり、これ以外の根菜類に目を向ける必要もあろう。因みに1998年3月の日本熱帯農業学会においては講演40題中10題はヤムイモその他根菜類に関するもので、例年になく根菜関連の課題が多かった。熱帯根菜の研究気運の高まりとも考えられよう。

幸いに沖縄農業研究会のメンバーは単一専門分野の縦断的構成ではなく、多彩な分野の人々が横断的に構成している研究会であるから、厳しいと云われる沖縄の農業が抱える問題や発展の方向等についてマルチ分野の情報交換を行い、沖縄に適した総合技術の嵩上げに寄与出来る最適な組織である。この利点を全会員が自覚し、相応に尽力することが期待される。